

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

もんむす・くえすと！創章

【作者名】

私は中二病です

【あらすじ】

もんむす・くえすと！の世界に一人の転生者が送られた。

その者の名は『アリア』

現代で現役男子高校生だったが

何時の間にか死んで神の間に居た。

それから色々あり

エロゲーの世界『もんむす・くえすと！』の世界に行く事になった。

前世で、もんくえを知っている彼は何を成すのだろうか

アリアは全てを救うことが出来るのだろうか……。

これは作者の勝手な妄想になります

男の娘、転生、チート、エロゲー、オリジナル設定

の要素が含まれますので認められない

もしくは『原作絶対！』という方も戻るを押しましょう。

上の要素が大丈夫な方のみ見て貰えると幸いです。

エロゲーですが、この小説はエロシーンが殆どありません

それも御了承下さい。

プロローグ

キキィー！ドカーン！

ある世界のある一人の少年が

車道に出てしまった子供を助けながらも

自身は車に轢かれてしまった。

「まだ……やりたい事が…… 沢山あったのにな……
さようなら……。父さん……。母さん……。」

そんな彼の言葉は虚しくも神には届かなかった

彼は15歳という若さで、この世を去った。

そして少年の魂が逝き着いた先は……

「すまなかったのっ」

目が覚めたら老人が少年に向かって頭を下げていた

少年は溜め息を吐きながら非常に冷たい目を老人に向けた

「アンタ、誰だ？」

行き成り俺に頭を下げて謝るとかボケたのか？

というか、ハゲ頭が眩しいんだよ。」

「ワシはボケてないぞい。

これはワシのチャームポイントじゃぞ！

御主は先程死んだであらう？」

「ああ、死んだな。」

「あれはな……」

スッキリした顔になった

「で、結局……アンタ、誰なの？」

「……………」

「何時までも寝てんじゃねえよ。

起きてんだろ？ 早く起きろ

さもなければ……

あれ以上の苦しみを味わう事になるぞ？」

「起きるから勘弁じゃ！」

さて、改めて自己紹介しようかのう

ワシの名は『ゼウス』

『最高神ゼウス』じゃ。」

「俺は嘘も冗談も嫌いだ。」

「残念じゃが、これは紛れも無い事実じゃ

ワシは神故に嘘は吐けない。」

「……………」

「話を戻すぞい

ワシが間違えて御主を殺してしまったのじゃ。

其処でじゃー！

御主、転生したくないか？」

「転生だと？ 来世にか？」

「いいや、違うのぉ〜

「御主が大好きな二次元じゃ」

「な……ん……だ……と……。」

「ネタは止めい。」

「どうじゃ？ ワシは礼も兼ねて転生させる

御主は楽しむ為に転生

悪い話では、あるまい？」

「そうだな……だが……。」

「どうしたんじゃ？」

「その転生する話を無しにして

前の世界に居る俺の家族と親友達を幸せにしてやってくれ
それが俺に対する礼って事で。」

「(いやひ……)。」

「どうした？ 出来ないのか？」

「ふ、合格じゃ。」

「ハア？ 何言ってるんだ？」

「合格だと言ったんじゃ。」

もし、あのまま浮かれて転生を選べば
魂を消してやるのかと思ったのじゃが
どうやら、その必要がなくなったみたいじゃな。」

「俺を試したっていつのか？」

「一応……な。」

転生させて世界を崩壊させられたら

仕事が増えるのでな

だから少しだけ試させてもらった

試した結果も礼にさせてもらうぞい。」

「勝手にしろ……」

で？ 俺は何処の世界に転生するんだ？」

「御主、前世で」

『もんむす・くえすと！』の世界に行ってみたいとか

夜な夜な呟いてたじゃろ？

其処の世界に行かせてやろう。」

「マジか？」

ゼウスが行かせてくれる世界

それは少年が前世でハマっていたエロゲーの世界だった

態度と表情には出さないものの

少年の心は浮かれ気分だった

「マジじゃ。(トドヤアア)」

「分かったからドヤ顔を止める。

イライラさせるなよ」

「それで、行くのか？」

「ああ、行く」

そして、あいつ等を救ってみせる……。」

「そうかそうか。」

それでは、能力を決めようかのう。」

「能力？ 良いのか？」

「言ったじゃろう？」

試した結果も礼にさせてもらおうと

まあ……試さなくとも能力を与えたがのう
それで、どんな能力が良いんじゃない？」

「能力による制限とかあるのか？」

「そうじゃな……」

余りにも強大なのは駄目じゃな

その都度、ワシが言おう。」

「分かった。」

「先ずは……」

こうして少年は能力を決めていった

そして選んだ結果が……。

「チート過ぎじゃぞ。」

「ああ、俺も今思った。」

「・鍛えれば鍛える程、強くなる身体（限界無し）」

・神力、気、魔力無限

・創造神になりたい

・創造と破壊を司る力

・神々の武器

・不老不死

・容姿イケメン

何じゃ、このチートぶりは……。」

「駄目か？」

少年は悲しそうな瞳で言った

ゼウスは仕方がなく諦めて承諾した

「今回はワシにも責任がある

大目に見てやるっ。」

「サンキュー。」

「態度わるいの早っ!？」

「ふ、演技力には自信があるんだよ。」

「ワシでも見抜けぬ演技力え……。」

「それで、何時行けるんだ？」

「ちょっと待つっのじゃ

力を渡すぞい

ハアアアアアアアア！」

ゼウスは行き成り叫んで身体が光りだした
それを面白そうに見る少年だった

「おお、ゼウスが輝いてるぞ。」

そして数秒後に光が世界を走った
目を開けると其処には光が納まったゼウスが居た

「ふう〜」

「譲歩完了じゃ。」

「もう終わったのか？」

「うむ、終わりじゃ」

「それじゃ、行くか？」

「いや、その前にやる事がある」

「やる事とな？ 何じゃ？」

「ゼウス」

「ん？ 何じゃ？」

少年は真面目な声で話し掛けて来た
それを悟ったのか

ゼウスも真面目に返事をした

「色々と世話になった。」

「本当に有り難う。」

少年は心から礼を言った

これにはゼウスも吃驚した

まさか少年が頭を下げてまで言うとは
ゼウスも思わなかった様だ

「ふむ……」

立派な神になるんじゃないぞ」

「おう、なってやるぞ」

全てを救う為に……。」「

少年は心とゼウスに立派な神になると誓った。
そして少年は次なる世界へと転生していった……

第1話

「んっ……此処は……？」

少年は目を覚ました

目を覚まし少年が見た光景とは……。

「何も無いな……」

文字通り無だな。」

そう無だった

言ってしまうと宇宙が出来る前だ

そして少年は自分自身の身体の異変に気付いた。

「何か視線が低いな

イケメンって頼んだ筈なのに……

取り敢えず鏡で見てみるか。」

ブウン！

少年は創造の力で鏡を創った

そして自身の顔を見てみると……。

「……女……？」

しかも、この顔は何処かで見ただ覚えあるぞ。

確かボーカロイドとかいうキャラに出てたな」

見た目は女になっていた

しかも、かなりの美少女と言えるだろう。

「あの爺……女にしゃがったのか？」

「とうかが今気付いたが声も高いな
一応、念の為に調べておくか。」

少年は自分の股間に手を当てて

男の象徴を調べた

一応男の持つべきものは存在していたらしい
男と分かって心の中で安心した様だ

その他にも身長や羽なども色々調べた

少年は背中を見ると6対6の12枚の羽が生えていた

「それにしても……」

この顔がイケメンだと？

羽が多過ぎないか？

まあ、良いけどさ

爺め……次会った時は

神力を纏わせた拳を、おみまいしてやる

さて神力と言えば

やっぱり魔法だよな

よし、まずは宇宙を作らないとな。」

それから少年は必死に修行をした

1000年は下らない年月を修行に費やした

その結果……。

「強くなり過ぎた……」

小さな神力で星破壊するとか誰だよ……俺だよ！

さて、ネタは飽きたな

そろそろ……始めるか。

宇宙の創造を……！！」

その言葉と共に少年は無限の神力を解放した

それこそが全ての始まり『ビックバン』である
少年の神力が全てを包み込むほどの大きな力となり
宇宙に超爆発を生み出した
それも宇宙を揺らす程の爆発である
キーン……ズドオオオオオオオオオオオン！という轟音が
何も無い無に鳴り響いた。

「うん……」

やり過ぎたか？

まあ、この位で良いだろう

さてと、何しようかね？

地球が出来るまで、約180億年は必要だ

どうするかなあ……

取り敢えず、各武器を極めるか

そうと決まれば……まずは素手からだな。

おらあああああああ！

少年が笑いながら拳を突き出していく

その度に拳から衝撃波が発射された

ズドドドドドドドド！という音を立てて

少年は突きを繰り返していた

それを1億という長い月日を掛けてしまった少年

少年は修行に集中し過ぎて星達が出来てる事を知らなかった

「ヤバイ……強くなり過ぎちゃった

気を取り直して次だ

次は……剣にするか。

おりやあああああああ！

少年は創造で神剣『ラグナロク』を創り出した
ぶん！ぶん！ぶん！ぶん！

という虚空を素振り音だけが辺りに木霊した
しかし時間を掛ければ掛ける事に
素振り音が違う音へと変わった
ヒュン！ヒュン！ヒュン！ヒュン！
という音へと変化していった
くそして約1000万年後く

「まだだ……」

まだ俺は剣を極めていない。
うおおおおおおお！」

少年は更に長い月日を剣の修行に費やした
その努力という結果が結果に繋がった
少年の素振りが2000万年で終わり
一振りが相手に数撃喰らわすというチートになった
しかも素振り音がヒュン！という音から
シュイン！シュイン！シュイン！シュイン！
という聞いただけで自分が斬られてる様な音に変化した

「ふ、これで剣は極めた

次は……槍か？

うおおおおおおおあああ！」

またしても少年は創造で武器を創り出した
今度は神槍『グングニル』を創り出した
何度も何度も突きを繰り返した
最初は無音だったが
次第にヒュン！ヒュン！という音が出始めた
くそして2億年後く

「何とか槍は極められたな……」

しかし、どんなに動いても汗は掻かないし
腹は減らない……
「ただだけチートなんだ？」

少年の言った通りだった

実際そうなのだ

創造神という身体になったこその特典だろう
後は修行という何億年も掛けてく内に
底知れぬ体力になったというのもあるのだ。

「ん？ 良く見たら辺りに星が出来てんじゃん

修行に夢中で気付かなかつたな

取り敢えず、次の武器を極めるか

次は何だ？ 弓か？

弓でも極めるか。」

そう言っただけ少年は神弓を創り出した

更に神弓『アポロン』を創造した

矢は神力を矢の形にして撃つ事にした

こうすれば神力の練習にもなるので

一石二鳥という訳である

最初は、まとも射る事が出来ずに

手元で弾いてしまった

時間を掛けると何とか射る事が出来た。

「弓は思ったより難しい

だが、それと同時に奥が深いな

面白い……絶対に極めてやる。」

少年は何度も何度も矢を射続けた

その、お陰か少年の放った矢は神速になった

威力も相当なものになっていた
本気を出せば星をも壊すだろう威力だった。
〜1億5000万年後〜

「流石に修行だけじゃ飽きて来たな

何か暇つぶしがあれば良いのだが

まあ、仕方ない

地球が出来るまで待つとするか

次は羽の修行でもしてみるか

羽だけで相手を倒したらカッコ良さそうだな。」

またまた少年は修行を開始した
今度は自身の羽の修行だと言う
どんな修行になるのだろうか。

「ん〜……」

どういふ事をすれば良いんだ？

取り敢えず神力を羽に纏わせてみるか。」

そう言っって少年は12枚の羽に神力を纏わせた
すると12枚の羽が全て輝き出した。

「おお、何だ「レ」？

取り敢えず威力？を試してみるか。」

少年は輝き出した12枚の羽を解放してみる事にした
何も無い所に12枚の羽を思いつ切り羽はたかせると
羽から色々なレーザー攻撃が出た

その威力は絶大だった

真っ直ぐにレーザーが飛んだと思ったら

途中で次元を割って何処かへ消えてしまったのだ

つまりは次元を割る程の威力という事だ。

「ふ〜ん……案外面白い攻撃だな

慣れるまで時間が掛かりそうだな

まあ、今までもそうだったんだ

最後には極められるだろう。

ハアアアアアアア！」

そう言い少年は羽で様々な事をした

一つの羽を思いつ切り羽ばたかせたり

身体全体を回転させて羽での攻撃を予測してみたりと

本当に多種多様な事をしていた。

〜それから3億年後〜

「やっと思い付く限りの事を極めたぞ……

でも、流石に疲れたな

今まで寝ずに修行に明け暮れていたからな

少し眠りに就くとするか。」

その言葉を最後に少年は宇宙で寝てしまった

宇宙で体育座りをして寝る者は少年以外に居ないだろう

少年が眠りに就いて約50億年後。

「ん〜……良く寝たな

ふわぁ〜……

あれから、どれ位経ったんだ？

少しアカシックレコードで見てみるか。」

少年は目を閉じて意識を集中させた

すると頭の中に様々な情報が流れ込んで来た

余り見過ぎると頭がパンクするので

知りたい所だけを見ていく。

「あれから50億年後ね

まだ地球は出来ないか

もつと修行するか

次は……。」

それから少年は地球が出来るまで修行に全てを費やした
その、お陰で少年に敵う者は居なくなってしまった

少し寂しさを感じる少年だったが

この後の展開に賭けてみる事にした。

〜そして120億年後〜

「やっと……地球が出来たな

思えば長く生き過ぎた気がするな

まあ、良い

強過ぎて困る事は無い

力があるから守れるのだからな

さてと……行くか。」

ビュン！

少年は虚空を蹴り出来上がった

地球へと突入していった。

「矢張り出来たてという事もあって

恐竜しか居ないな

どれ世界の真ん中に天界を創ろうかな。」

少年は世界の真ん中らしき所へと飛んで行った

そして少年は頭の中で細かくイメージをして

神力をイメージ通りに操った

すると其処には地球が出来たばかりとは思えない程の景色が出来上がっていた。

辺り一面の花畑

奥へ進んだら噴水があり

更に奥へ行けば其処には大きな扉があった

それこそが天界に通じる扉だ

天門と言っべきだろうか

少年は天門を潜り抜けて天界へと赴いた。

「へえ、思ったより神秘的な所だな。」

光る花に透き通るような川

まさに天界と呼ぶには相応しいだろう

「さてと、そろそろ本題に入るとするか

先ずはイリアスとアリスフィーズを創造するか

神と邪神の創造なんてした事が無いからな

頼むから失敗しないでくれよ……

ハアアアアアアア!!!」

少年は心の中で失敗しません様にと呟きながら

神力で世界全体を震わせた

そして少年は神力を解放した

天界だけでなく世界に光が走った

少年が目を開けると其処には……

第2話&キャラ設定

少年は自身の創造の力で
もんむすの主要人物
女神イリアス、邪神アリスフィーズを創造した
しかし少年の目の前に存在していたものとは……。

「球体……？」

しかも白と黒の球体……

ハア……

結構力を使って創造したっていうのに
失敗に終わったとか最悪だ
ふて寝してやる……。ふん！」

少年はイリアスとアリスフィーズが居ない事に逆切れして
ふて寝する事にした少年だった
しかし、その場でフワフワと浮かんでいる
二つの白と黒の球体は消えず静かに
その場で浮いていた
この二つの球体が後に少年が
驚くべき出来事が待っているのだった。

「眠いし疲れたし

もう寝るか……。」

数億年は起きないからな！」

そう言って少年は空中で

体育座りをする形で浮き始めた

そして少年の周りには光の壁が集まって行った

少年は次第に光の球体に包まれていき

最後には大きな光の球体だけが浮いていた
少年が数億年経つまで
絶対に破れない光の殻を作ったのだ。
〜2億年後〜

「ふわぁ〜……………」

良く寝たな

それじゃ、そろそろ起きますかね。

ハアアアアアアア!!」

ビキ！ビキ！ビキ！ビキ！バリーン！

少年は自分の神力を解放する事によって
光の殻を内側から破って出て来たのだ。

「ん？ 何か雰囲気が違うな……………」

まあ、良いか

奥に進むか。」

少年は奥へと進んだ

奥へ進むにつれて自分程ではないが

巨大な神力が感じられた。

「誰だ？ まだ俺は天使を作ってないのだが……………」？

取り敢えず行けば分かるか。」

そう言つて少年は奥へ奥へと進んで行った。

〜少年Side終了〜

〜??? Side〜

私は孤独だった

生まれた時から孤独だった

いや、正確には私と遂になる存在は居るには居る
しかし存在が遂になるので相容れる事は無かった
私は気付いたら孤独で
何を糧に生きたら良いのか分からなかった。

だから私は孤独を紛らわす為に
自分の力を分け与えた分身を生み出した
最初こそは力の使い方が分からなかったが
やっていく内に段々とコツも分かかって来て
様々な事が出来る様になって来た。

そして私という存在が生まれてから
早2億年……

現在は私が生み出した“最初の天使”
ミカエラとルシフィナと名づけ
この双子の天使と共に
今後は何をすべきか考えていた時だった。

「イリアス様、此処天界にある
光の球体を調べてみては如何でしょうか？」

そうミカエラが呟いた
光の球体……

あれは私が生まれた時からあった筈。
あの中には何があるのだろうか？

「そうですね
それでは、調べてみましょう。」

「分かりました。」

私達が光の球体の所まで行こうとした時だった
前から何かが歩いて来る音がした
私達は戦闘態勢を取り警戒した。

「何の音でしようか？」

「分かりません」

二人共、油断してはなりませんよ。」

「はい。」

ザッザッザッと足音が近づいて来た
そして私達が見たものは……。

「??? Side 終了」

~~~~~

名前・アリア《ありあ》

種族・神《創造神》

性別・男

身長・140cm

体重・35<sup>キ</sup>kg

容姿・薄い桃色の髪で瞳はクリスタル色に輝いている。

ぶつちやけるとVOCALOIDのIA

神力、魔力、気；無限

能力：創造と破壊、不老不死

好きなもの（こと）・修行、寝ること、イリアス、アリスフイーズ  
ミカエラ、ルシフィナ

嫌いなもの（こと）・眠りを妨げる者、魔物を毛嫌いする者

#### 参考

前世でテンプレ的な死に方をした少年

自分を殺したゼウスが少し苦手である。

しかし転生させてくれた事を

ちゃんと感謝している様子

男の娘にした事を許すつもりはないらしい。

余談だがアリアの服装はIAと殆ど同じである。

唯一違うのはスカートが短パンになって羽が生えた位だ。

この世界の強さの基準は

アリア 越えられない壁      イリアス、アリスフイーズ

世

アリス、ルカ      四天王の順番だ。



### 第3話 　　～アリアSide～

少年Side

あれから俺は天界を奥へ奥へ進んだ

一番奥の場所に大きな神力を感じたからだ

俺は何の躊躇いもせずに進んだ

進まないといけない気がしたからだ

そして一番奥の場所へと着いた

其処に居た者とは……。

「……………」

「「「っ!?!」」」

……………え？

何でイリアス、ミカエラ、ルシフィナが居るの？

イリアスは何とか納得出来るけど……………

いや、納得出来ないけど……………一応しておこう

それにしてもミカエラとルシフィナは早くないか？

というか向こうは俺の事を警戒してるな

取り敢えず何か喋るか。

「あ……………」

初めましてと言うべきだろうか？

其処に居る女神

俺が誰だか分かるか？」

「……………貴方の事は初めて見ましたし

貴方の事なんて知りません……………」

「貴方は何者ですか？」

「イリアス様に危害を加えるのでしたら誰であることも敵と見なし迎撃します。」

少年はイリアスに自分自身の事を聞いた  
イリアスは知らないと答えた

少年は思考の渦に入り込んだ。

「( ) どういう事だ……？」

もし勝手に生まれたとしても

地球を創造した俺の事を分かる筈と思うのだが……

ん……仕方ない

俺の事を話すか。

信じてもらえるだろうか？

まあ、話してみますか。( )

少し俺の話聞いてくれないか？」

少年は思考の渦から出て

自身の事を話す事を決意した。

「「「……。」」」

「別に何かしようって訳じゃない

今まで何をして来たか

それを聞いて欲しい

聞いておいて損は無い筈だ。」

「……分かりました

貴方の話とやらを聞きましょう。」

「イリアス様？」

「但し、変な行動をしたら  
躊躇いなく攻撃します  
宜しいですね？」

「ああ、それで良い  
それじゃ、全てを話そう……。  
俺は……」

「……。」

少年は一日間を置いて  
息を整えてから喋り出した。

「この星の創造神だ。」

「創造神!？」

「そう、創造神だ

180億年前に俺は何も無い宇宙で誕生した  
そして俺は神力を操れる様に千年以上は修行に費やした  
修行の末に俺は神力を上手く操れる様になった  
そして俺は神力を使いビックバンを引き起こした。」

「ビックバン……」

宇宙の始まりの光ですね。」

「宇宙の……。」

「始まりの光……。」

「そうだ。」

それから俺は約130億年は更に修行をして  
剣、槍、弓、扇、鞭、その他の武器も修行をしたのだ  
その結果、全ての武器を扱える様になった。」

「暇だったんですね。」

「ああ、孤独故に何もする事が無いしな

あの頃、剣を振っていたのが懐かしいな……。」

「孤独……。」

イリアスは孤独という単語を聞いて  
俯いてしまった

矢張り2億年という歳月はイリアスにはキツかったか？

まあ……それも今日までだ

これからは俺と一緒に居て

孤独から救ってやるからな。

「話を聞く限り

ずっと修行してる様ですが……。

130億年と言いましたね？

後の50億年は何をしてたのですか？」

ミカエラが突然質問をして来た

矢張り気になるか……

取り敢えず答えるか。

「あ、それは私も気になりますね。」

「私も気になります!」

「寝てた。」

「「は?」」

矢張り、こうなつたか

だから言いたくないんだ

50億年も寝てるとか……

自分でも、どんだけだよ……

と言いたくなるな。

「だ・か・らあ!」

寝てたって言ってるんだよ

修行に疲れて寝てた。」

「50億年も寝るとか

貴方は誰ですか?

あ、創造神でしたね。」

「うむ、創造神だ。」

「(何故か分かりませんが……

見てると癒されますね。)」

俺はイリアスのネタ?に

腕を組みながら笑顔で頷いた

俺は止まっていた話を進めた

「続きを話すぞ?」

地球が誕生するまで  
俺は修行に明け暮れていたのだ  
そして地球が出来たのを境に修行を止めて  
地球に下り立ったって訳だ  
最初の頃は恐竜が多かったが  
今は、どうなってるか知らん  
そして俺は世界の中心である  
此処に天界を作った。」

「成程、そついう事でしたか  
だから此処は世界の中心にあるのですね  
これで納得しました。」

「何故、世界の中心に  
天界を作ろうと思ったのですか？」

「それは私も思いました。」

「確かにミカエラが言つのも一理ありますね。  
どついでです。」

「何となくだな。」

「」「」。

イリアスを筆頭に  
ミカエラ、ルシフィナも  
俺に冷めた目を向けて来た  
空気が重い……

「う、何だよぉ……」

別に世界の中心に天界を作っても  
良いじゃんかよぉ〜……………（イジイジ）」

俺は涙目になりながら口を尖らせて  
人指し指と人差し指をつんつんと突き合わせて  
いじけていた

「……（癒されますね……………）」

「話を戻すぞ……………？」

俺は天界を作った後に

自身の神力で神と邪神を創り出そうとした……………」

「……っ!?!」

俺の“神と邪神を創り出す”という言葉に

三人は驚いた

それも、その筈だ

普通なら、そんな事は出来ないのだからな

結局、俺は出来なかったからな……………。

「しかしだ……………」

俺が作り出したのは神でも邪神でも無かった

只の光の球体と闇の球体だった

つまりは失敗だな。」

「…………………」

「滑稽だろうっ？」

俺の神力が数字で例えて1億あるとすれば  
5000万も使ったんだ

しかも最後には球体が生まれたというだけ  
ハア……最悪だったな。

そして俺は気分を害したが故に……ふて寝した。」

「「ふて寝……ぷくくくく」」

ふて寝という言葉に三人が笑い出した

あゝ……言っんじゃなかった！

俺は笑われた事に腹が立ったので  
腕を組み、そっぽを向いた

「どうせ俺は気が短いですよゝ

ふんだ！

……そして、俺は自らの身体を光の球体に包み

2億年もの間、寝ていたという訳だ。」

「2億年も寝てたのですか？

本当に呆れた人ですね

あ、神でしたね

これは失敬失敬。

……え？」

「そうですね

普通は数日とかなのに……

寧ろ、其方の方が貴方らしいという訳でしょうね

ええ、納得出来ます。

……え？」

「お姉ちゃんのこと通りですね

会って間もないのに

納得出来てしまいます。



何故でしょうか？

……え？」

「どうした？」

「光の球体の中で

寝てたのですか!？」

俺の言葉に三人が

一斉に慌てて聞いてきた。

ど、どうしたんだ……？」

「うわっ!？」

そんな接近して来るな。

何か問題でもあったのか？」

「ええ、大有りです。」

「そうですね。」

「その話が本当だとすると

貴方が話した事が

全て真実という事になりますね。」

「最初から本当の事しか話してないぞ？」

まあ、信じようとも信じなくとも

別に良いがな……。」

「……」

「この世界に来た俺は当初から

孤独を感じてしまっていた  
まだ孤独を感じているのか  
どちらでも良いという言葉を  
三人に言ってしまった  
何をしているのだろうか、俺は……。

俺は何をしに来たんだ？

この世界を変える為に来たんだろうが！

もっと確りしろ俺！

バチン！バチン！

俺は両手で強く両頬を叩いた

その光景を見ていた三人は首を傾げていた。

「どうした？」

まあ、それよりも……だ。

俺の話、信じてくれるか……？」

「その問いに答える前に」

言わなければならぬ事があります。」

「イリアス様？」

「言わなければならぬ事？ 何だ？」

イリアスが俺に向かって

そう伝えた。

何なのだろうか？

「貴方が先程

自身の神力で神と邪神を創造しようとした……。  
そう仰いましたね？」

「ああ、言ったぞ。」

「でも、失敗したと……。」

「そつ、言いましたね？」

「ああ、失敗したな。」

「それは間違いです。」

「何故だ？」

「何故なら貴方が創り出した

その光の球体は……。」

「光の球体は？」

「……。」

「私だからです。」

「……え？」

「冗談だろつ？」

「冗談では、ありませんよ

私が生まれた時に

邪神アリスフィーズも横に居ましたからね

貴方が中で寝ていた光の球体も

目の前に、ありましたからね。」

「俺は創り出せたのか……？」

「はい、そうですね！」

「お母様」？」

イリアスの言葉に俺の身体を安心感が包んだ  
安心したのか腰が抜けて

地面にペタンと座ってしまった

しかも涙を流すという失態までしてしまった。

「そうか……そうか……！」

良かった……（ニ「」）」

「／／／!?」

「（あれ〜……？

お姉ちゃんとイリアス様

この人に落とされちゃいましたね。

創造神、恐るべし……！）」

イリアスとミカエラが俯いた

何故か顔が赤いな体調が優れないのか？

「どうした？ 体調が悪いのか？」

「い、いえ……」

何でもありません。」

「そ、そうか？」

よいしょっと。

所で、イリアス？」



## 第4話 　　＼イリアスSide＼

＼イリアスSide＼

ザッ！ザッ！ザッ！

段々と足音が近づいて来た

この天界に私達以外に居ない筈

一体誰なのだろうか？

私が考えていると

足音の正体がハッキリと見えて来た。

「……………」

「！！！！！！！！」

私達は驚愕した

その姿に

その身から溢れ出る程の神力に

私よりも数が多い羽

私よりも規模が違い過ぎる神力

この者は一体……………」

そして何よりも驚いたのが

懐かしいという雰囲気だった。

「あ……………」

初めましてと言っべきだろうか？

其処に居る女神

俺が誰だか分かるか？」

私が考えていると

突然、目の前の者が喋り掛けて来た  
放置するのも悪いので返事をした。

「……貴方の事は初めて見ましたし  
貴方の事なんて知りません……。」

「貴方は何者ですか？」

「イリアス様に危害を加えるのでしたら  
誰であるうとも敵と見なし迎撃します。」

ミカエラ、ルシフィナの二人は  
目の前の者を警戒していた  
それ程までに危険な相手だろう  
神力は多ければ多い程に  
強さの証となるのだから。

「……。」

目の前の者は腕を組み  
何やらブツブツと呟いていた。  
何を考えているのだろうか？  
私が考えていると向こうが喋り掛けて来た。

「少し俺の話を聞いてくれないか？」

「……。」

「別に何かしようって訳じゃない  
今まで何をして来たか  
それを聞いて欲しい

聞いておいて損は無い筈だ。」

少し怪しい気もするが

私は少しだけ考えた据えに返答した。

「……………分かりました

貴方の話とやらを聞きましよう。」

「イリアス様？」

ミカエラとルシフィナが

不思議そうな顔で私を見て来た

普通は知らない相手の事を素直に聞く事を

不思議に思うだろう

しかし、私は聞いてみたかった

だから、条件付きで話してもらおう。

「但し、変な行動をしたら

躊躇いなく攻撃します。

宜しいですね？」

「ああ、それで良い

それじゃ、全てを話そう……………」

俺は……………」

「……………」

目の前の者が一旦間を置いた

そして息を整えたのか喋り出した。

「この星の創造神だ。」



「『創造神!?!』」

この者が言い出したのは予想を上回るものだった  
まさか、この星の創造神と名乗るなど……

しかし強ち嘘ではないと分かる

その身に纏う神力と

何故か懐かしいという雰囲気

私は少しづつ信じようとしていた。

「そう、創造神だ

180億年前に俺は何も無い宇宙で誕生した

そして俺は神力を操れる様に千年以上は修行に費やした

修行の末に俺は神力を上手く操れる様になった

そして俺は神力を使いビックバンを引き起こした。」

「ビックバン……」

宇宙の始まりの光ですね。」

ビックバンを起こせるのは

神のみしか許されない行為だ

例え天使がビックバンを

起こすのを許可出来たとしてもだ

先ず無理だろう

ビックバンを起こすのは

私ですら容易ではないのだから

天使では無理にも程があるだろう。

「宇宙の……。」

「始まりの光……。」

「そうだ。」

それから俺は約130億年は更に修行をして  
剣、槍、弓、扇、鞭、その他の武器も修行をしたのだ  
その結果、全ての武器を扱える様になった。」

「暇だったんですね。」

「ああ、孤独故に何もする事が無いしな

あの頃、剣を振っていたのが懐かしいな……。」

「孤独……。」

創造神と名乗る者は130億年もの間

修行に明け暮れたと言った

それ程までに長い年月を生きると思つと私はゾツとした

そんな長い年月を過ごすとすると

私は確実に耐えられないだろう

孤独というのは神すらも蝕むのだから……。」

「話を聞く限り

ずっと修行してる様ですが……。」

130億年と言いましたね？

後の50億年は何をしてたのですか？」

突然ミカエラが質問をした

確かに気になる……。」

私は気になるので答える様に言った。

「あ、それは私も気になりますね

是非とも聞かせて欲しいです。」

「私も気になります…!」

「寝てた。」

「『』は?『』」

「この者は本当に予想を上回る事を言ってくれる  
50億年もの間、寝るとは……  
創造神?と名乗るだけの事はあるだろう。」

「だ・か・ら!」

「寝てたって言ってるんだよ  
修行に疲れて寝てた。」

「50億年も寝るとか

貴方は誰ですか?

あ、創造神でしたね。」

私は最近、流行っている  
ネタ?というのを言ってみた  
すると向こうもネタ?に気付いたのか返して来た。

「うむ、創造神だ。」

何故か腕を組み微笑みながら返答して来た  
少し和むのは何故だろう?  
すると創造神(仮)は止まっていた話を戻した。

「続きを話すぞ?」

地球が誕生するまで  
俺は修行に明け暮れていたのだ  
そして地球が出来たのを境に修行を止めて  
地球に下り立って来た訳だ  
最初の頃は恐竜が多かったが  
今は、どうなってるか知らん  
そして俺は世界の中心である  
此処に天界を作った。」

「成程、そついう事でしたか  
だから此処は世界の中心にあるのですね  
これで納得しました。」

この創造神（仮）が世界の中心に作つたから  
此処は世界の中心にあるのだと理解した  
ミカエラが何か気になったのか質問をした。

「何故、世界の中心に  
天界を作ろうと思ったのですか？」

「それは私も思いました。」

「確かにミカエラが言つのも一理ありますね。  
どついでです。」

どついう理由で作つたのだろうか？  
其処は少し気になっていた所だ。

「何となくだな。」

「」「……………」

この創造神（笑）は本当に予想外だ  
何となくで中心に作った等……

私達は創造神（笑）にとっても冷めた目を向けた。

「う、何だよあ〜……」

別に世界の中心に天界を作っても

良いじゃんかよあ〜……（イジイジ）」

私達が冷めた目を向けると

創造神（笑）は涙目になりイジけ出した

見ていると癒される……。

「話を戻すぞ……？」

俺は天界を作った後に

自身の神力で神と邪神を創り出そうとした……」

「！！！！！！！！」

創造神（笑）は話を戻し喋り出した

そして創造神（爆）がとんでもない事を言い出した

自身の神力で神と邪神を作ろうとしたというのだ

何故、そんな事をしようとしたのだろうか？

私には少し理解出来ない……

しかし、私達は似ていると思った

別の存在を生み出し孤独を紛らわす。

この創造神（爆）も、そうなのだろうか？

「……っかっだ……」

俺が作り出したのは神でも邪神でも無かった

只の光の球体と闇の球体だった

つまりは失敗だな。」

「……」

創造神（爆）は悲しげな目で私達に創造を失敗したと告げた。しかし、創造神（爆）の言葉で私の中の疑問が確信へと変わった

「滑稽だろう？」

俺の神力が数字で例えて1億あるとすれば5000万も使ったんだしかも最後には球体が生まれたというだけハア……最悪だったな。そして俺は気分を害したが故に……ふて寝した。」

「ふて寝……ぶっくくくく」

矢張り、この創造神（笑）は面白い存在だしかし、ふて寝とは……私でも、しない行動だ。

「どうせ俺は気が短いですよあゝふんだ！

……そして、俺は自らの身体を光の球体に包み2億年もの間、寝ていたという訳だ。」

「2億年も寝てたのですか？」

本当に呆れた人ですね

あ、神でしたね

これは失敬失敬。

「……え？」

「そうですね」

普通は数日とかなのに……

寧ろ、其の方が貴方らしいという訳でしょうね

ええ、納得出来ます。

「……え？」

「お姉ちゃんの言っ通りですね

会って間もないのに

納得出来てしまいます。

何故でしょうか？

「……え？」

「どっした？」

「光の球体の中で

寝てたのですか!？」

創造神（笑）の言葉に

私達は驚き詰め寄った

あの球体には、この創造神（笑）が

入って居たとは……

これで私の中の確信が絶対に変わった。

「うわっ!？」

そんな接近して来るな。

何か問題でもあったのか？」

「ええ、大有りです。」

「そうですね。」

「その話が本当だとすると  
貴方が話した事が

全て真実という事になりますね。」

「最初から本当の事しか話してないぞ？」

まあ、信じようとも信じなくとも  
別に良いがな……。」

「……」

創造神（笑）は寂しそうな表情で言い切った  
私よりも長い時を生きて来たのだから  
当たり前だろう

しかし良く長い時を孤独に耐えられたものだ  
すると創造神（仮）は首を横に振ったり  
自分自身の顔をビンタしたりと  
本当に存在そのものが笑える。

「どうした？」

まあ、それよりも……だ。

俺の話、信じてくれるか……？」

「その問いに答える前に」

言わなければならぬ事があります。」

「イリアス様？」

「言わなければならぬ事？ 何だ？」



私は思っている事を口にした  
ミカエラとルシフィナが疑問に思い  
私を見て来た  
しかし私は構わずに喋り続けた

貴方が先程

自身の神力で神と邪神を創造しようとした……。  
そう仰いましたね？」

「ああ、言ったぞ。」

「でも、失敗したと……。  
そう、言いましたね？」

「ああ、失敗したな。」

「それは間違いです。」

「何故だ？」

「何故なら貴方が創り出した  
その光の球体は……。」

「光の球体は？」

「……。」

「私だからです。」

「……え？」

「冗談だろっ？」

「冗談では、ありませんよ

私が生まれた時に

邪神アリスフィーズも横に居ましたからね

貴方が中で寝ていた光の球体も

目の前に、ありましたからね。」

「俺は創り出せたのか……？」

「はい、そうですね！

”お母様”？」

ええ、そうです

貴方は星を作り出し

私をも作り出してくれた

本当に感謝しています……”お母様”

「そうか……そうか……！」

良かった……（ニク）

「／／／!?」

くっ……!?

お母様の泣き顔と笑顔が可愛いですね

運命よ……私は母親に恋をしました……。

「どうした？ 体調が悪いのか？」

「い、いえ……」

何でもありません。」

